

指導資料



鹿児島県総合教育センター

国語 第98号

- 中学校，盲・聾・養護学校対象 -
平成15年9月発行

生徒が主体的に取り組む推敲活動の指導

生徒が、「書くこと」を苦手とする傾向が見られるようになって久しい。しかしながら、近年における通信機器の飛躍的な発達やコンピュータの目覚ましい普及等によって、新しいスタイルで書く機会が増加しており、いつまでも「書くこと」が苦手などと言ってはおられない。今の世の中は、「書くこと」という活動が容易に時と場を越えてしまい、しかも伝達という機能が瞬時に完結してしまう。また、同時に記録・保存という目的をも果たしてしまう多目的・多機能的な時代を迎えているのである。

学習指導要領においても、これからの時代に対応すべく、生徒が「書くこと」の活動に積極的に取り組み、通信機器等を自在に活用することができるようにするため、生徒の発達の実態に即しながら社会の要請に応じた「書くこと」の学習事項を設定することが重要であると指摘している。つまり、これからは「何を書くか」という表現内容の重視に加え、「何のために、どのように工夫して書くか」といった推敲活動について、より実践的な表現目的の認識や適切な表現方法、表現手段の選択が求められているのである。

そこで、本稿では生徒が適切な表現方法や

表現手段で書いたり、自らの力で書く目的を明確にして修正したりするなど、推敲活動が顕著に表出する作文指導等について焦点化し、生徒が主体的に推敲活動に取り組むための指導の在り方について述べる。

1 これからの時代の要請に応じた作文指導

- (1) 目的や相手意識を明確にした作文指導
学習指導要領では、生徒の発達段階と興味・関心等を考慮し、これまでの目的や相手意識がはっきりとせず、作成にのみ膨大な時間が費やされていた生活文中心の作文指導について具体的な手だてが示された。

まず、生活文だけにこだわらず、日記文や手紙文、感想文、記録文、報告文、説明文、意見文、議論文、更にはメモや掲示の文、童話や創作文、詩歌など、多様な文章形態を踏まえ、目的に応じた作文指導に取り組むことが求められている。

次に、作文指導のどの過程においても、ただ漠然と生徒に活動させるのではなく、書き手自身の姿勢や立場、読み手の認識、書く目的、望ましい文章構成などを明確にして活動させることが求められている。

(2) モニタリングを重視した作文指導

生徒が書くという目的意識を明確にもつと、適切な文章形態が選択できるだけでなく、主題設定の際や、構想、記述の段階においても、常に自分の書く目的に応じて先の見通しをもとうとしたり、活動の途中で、これまでの書く活動の過程を振り返ろうとしたりする。このように、生徒は明確な目的意識が支えとなり、自己の活動をモニタリングしながら作文を書き進めていこうとするのである。

つまり、各指導の段階において、生徒が常に自己の活動をモニタリングしやすい学習環境を設定すれば、生徒は主体的に作文活動に臨むと考えられる。

2 主体的な推敲活動

推敲というと、「記述後に語句や文のねじれ等を修正すること」というイメージが強い。しかしながら、推敲とは書き手である生徒が常に主題や読み手の条件等を確認しながら、内容の不足等を意識して新しい題材を求めて取材したり、構想を見直したりするなど、自己の活動をモニタリングしながら取り組む活動のことである。

(1) イメージマップづくり

生徒は、既存の知識や経験を基に表現しようとする。しかしながら、主題を設定しても、生徒自身の知識や人生経験、読書体験等だけでは限りがあり、主題に沿って出されるイメージの量もわずかである。

そこで、図1のように主題を中心に据え、そこから思い付く言葉を線でつなぎ、

言葉を広げながらイメージマップを作成する。書き出した項目同士で、関連のあるものも線でつなぐので、イメージも更に膨らむのである。



図1 イメージマップ例



図2 プログラムの構成表

(2) 検討しやすい構成表の設定

生徒が自分の力で推敲するためには、作文の構成が一目でとらえられ、自由に内容を検討することができる構成表を設定する必要がある。

プログラム等の案内文の場合、図2のようにイメージマップでとらえたプログラムの内容を、紙面分けした構成表に配置し、内容のバランス等を検討させる。



図3 生活文の構成表

生活文の場合、図3のようにイメージマップを参考にして作成させた150字程

度の短い粗筋を構成表の中心に据え，イメージマップで出された語句を内容に従ってグルーピングし，意味段落を設定させる。それぞれの意味段落には，小見出しを付け，作文の構成をとらえやすくしておく。

(3) 付箋紙^{せん}を活用した推敲

作文を書く手がかりとなるイメージマップの語句を付箋紙で集めることで，生徒は推敲に一層取り組みやすくなる。

ア 自由に動かすことができる付箋紙

イメージマップで蓄積した付箋紙の語句は，構成表上で自由に動かしながら構成を検討することができる。また，内容によって構成表上の付箋紙を追加添付したり，はがしたりすることで，簡単に語句の加除修正が可能となる。

このように，自由に動かしながら構成を考え，文章を練り上げることで，生徒の主体的な推敲は充実していく。

イ 色分けが可能な付箋紙

図2の生活文の場合，情景的な内容を黄色の付箋紙に，心情的な内容を桃色の付箋紙に書かせ，構成させている。

このように，付箋紙を色分けして検討させることで，一目してどの意味段落の情景描写が不足しているのか，どの場面の心情面を更に膨らますべきのかなど，即座に自己判断して推敲させることができる。

3 推敲の充実

生徒個々の情報収集力や作文の推敲力には限界がある。そこで，推敲を充実させる

ためには，生徒相互のかかわりを活性化させ，推敲を助け合う場面を設定したり，教師が適切に支援する場面を設定したりする必要がある。

(1) インタビュー・アドバイスの活用

生徒が自分の力で構成したイメージマップや構成表について，ペアやグループでインタビュー・アドバイスに取り組みせ，付箋紙の語句を増やし，更にイメージを広げたり，構成を充実させたりする。

(2) 机間指導による教師の支援

生徒が推敲に取り組んでいる際に，机間指導しながら助言していくと，推敲活動を妨げることが多い。

そこで，机間指導しながら気付いたことを付箋紙に記してアドバイスしたり，予測されるつまずき等への助言を記した付箋紙を事前に用意して提供したり，事前に示した評価規準を表すシールを与えたりするなど，教師のアドバイスが推敲に大きな示唆を与える。



写真1 シールを使った教師の支援

写真1は，吉田町立吉田南中学校の時任貴子教諭が，机間指導をしながら観点ア～ウに基づいてシールで支援している

場面である。

観点ア（青色のシール）

自分の意見をもっと大切にしよう。

観点イ（黄色のシール）

もっと事実や情報を盛り込もう。

観点ウ（赤色のシール）

構成表をもう一度参考にしてみよう。

4 推敲の実践例



写真2 付箋紙を活用した推敲指導例

写真2は、西之表市立榕城中学校長谷洋彦教諭が、1年生の学級で「学級弁論大会」用に作成した最終原稿の推敲活動を指導した際の板書である。

ここでは、学習目標を「相互アドバイス（付箋紙の利用）をして、弁論原稿の推敲・清書をしよう。」と設定し、3色の付箋紙を活用して推敲活動に取り組みさせた。

生徒には、桃色と黄色の付箋紙を持たせた。桃色の付箋紙は「良い点」のアドバイス用、黄色の付箋紙は「改善点」のアドバイス用として活用させた。活動に入る前に、それぞれのアドバイスの観点を下記のとおり示した。

< 桃色の付箋紙（良い点） >

- ・ 表現描写が工夫されている。
- ・ 分かりやすい、面白い表現がある。

- ・ 主題がはっきりしている。
- ・ 構成（話の筋道）がはっきりしている。
- ・ 書き出しや結びが工夫されている。

< 黄色の付箋紙（改善点） >

- ・ 表現・描写を工夫した方がよい。
- ・ 主題が分かりにくい。
- ・ 構成（話の）筋道が分かりにくい。
- ・ 題材の工夫が必要である。
- ・ 書き出しや結びの工夫が必要である。
- ・ 誤字・脱字がある。
- ・ 文体の不統一が見られる。

また、青色の付箋紙については、教師が机間指導する際のアドバイス用として活用した。

写真3のように、生徒がインタビュー・アドバイスを繰り返し、気付いたことをメモした付箋紙を交換しながら楽しく推敲する様子が、各グループで見受けられた。



写真3 インタビュー・アドバイスに取り組む生徒

教師は机間指導をしながら付箋紙の色を確認し、生徒の推敲状況を評価すると同時に、評価した内容を付箋紙で支援している。このように付箋紙を活用することで、まさしく「指導と評価の一体化」が実現されており、今後、付箋紙等を活用した推敲指導の充実が期待される。

（第一研修室）